



## 一般財団法人川村文化芸術振興財団 2024年度 ソーシャル・エンゲイジド・アート支援助成決定!



	A		
B	C	D	
E	F	G	

### 2024年度助成対象プロジェクト (全8つのプロジェクト)

単年度助成額: 40万円~150万円/件 総額: 440万円

- **ドキュ・アツタン** 「ドキュ・アツタン シアター —ミャンマーのクリエイターたちとともに「声」をあげる／届けるプロジェクト」
- **マダン劇プロジェクト** 「マダン: 民衆が共謀する広場」
- **瀬尾夏美+小森はるか** 「へびと地層プロジェクト」
- **渡邊拓也** 「メンテナンス労働と共生関係のドキュメンテーション」
- **志賀理江子** 「オープンスタジオ / 3.11後の復興に関する資料ライブラリー」
- **藤口諒太** 「匿名の語り」
- **寺田健人** 「ネガティブな想像上の家族からポジティブな家族像を生み出すために」

(順不同)

長期助成額: 50万円/件 2023年度から継続支援

#### ● Don't Follow the Wind

一般財団法人川村文化芸術振興財団(理事長 川村喜久)では、ソーシャル・エンゲイジド・アートに対する支援助成事業を2017年に開始し、今回2024年度は7回目の公募と審査を行いました。

2024年度は、昨今の時代の中で多種多様な社会課題の意識が高まり、ソーシャル・エンゲイジド・アートを通じて戦争や平和に対するテーマ、国境や移民に注目するテーマ、環境汚染に関するテーマなどを取り上げるプロジェクトが日本国内外から83件(海外5件、国内78件/前年比総合36件増)の応募がありました。今回選ばれたプロジェクトは、このような現代社会に目を向けテーマ設定された7つの多様なプロジェクトが応募の中から採択されました。2024年度は助成対象の当該プロジェクトを実施するためのプロトタイプ(事前ワークショップ、試作、レクチャー、映像等)も含め、2024年度に発表していただきます。

また、2023年度より開始した、活動を継続するプロジェクトを対象とした長期助成も継続して助成します。

コミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す日本国内で実施されるソーシャル・エンゲイジド・アートプロジェクトがより活発化していくことを願います。



## ドキュ・アッタン シアター —ミャンマーのクリエイターたちとともに「声」をあげる／届けるプロジェクト|Docu Athan

2021年にミャンマーで起きたクーデター以降の困難のなかで、表現活動に取り組み、継続するジャーナリストや映像制作者、アーティストなどを支援するためのオンラインプラットフォーム《ドキュ・アッタン (Docu Athan)》の活動をきっかけとし、ミャンマーの表現者らとともに、ドキュメンタリーや映像作品をはじめとした多様な芸術表現を制作・紹介・発信しながら、日本国内外のさまざまな地域・場所で「シアター＝声を共にする場」を構築し、多様な「声＝芸術表現」を広げていくプロジェクト。名称に含まれる「アッタン」はミャンマーの言葉で「声・意見」などの意味がある。

### Docu Athan (ドキュ・アッタン) :

プロジェクト名と同じ名称の団体「ドキュ・アッタン」は映像作家の久保田徹、ジャーナリストの北角裕樹の2人を発起人としたで始まった、ミャンマーの映像作家やジャーナリスト、芸術家らと共に、映像制作と発信を共にするためのプラットフォームプロジェクト。ミャンマーの映像作家ら、キュレーターの居原田遥をはじめ、さまざまな人々によって企画・運営がなされている。

<https://www.docuathan.com/>



## マダン：民衆が共謀する広場|マダン劇プロジェクト

マダン劇プロジェクトは、日韓朝のアーティスト、キュレーター、地域コミュニティが協働してマダン劇に関するリサーチ、ワークショップ、トークイベントを行うことで、現代社会におけるマダン劇の実践的価値を探究してきました(「マダン」とは、韓国・朝鮮語で地域社会の共同広場という意味)。本プロジェクト「マダン：民衆が共謀する広場」では、主に京都におけるマダン劇の精神および表現形式をリサーチするとともに、ワークショップおよびパフォーマンス試作を中心とする協働の場を開くことで、日韓の間で民衆の在り方を描いてきたマダン劇の現代的意味を新たに提示する予定です。

### マダン劇プロジェクト:

アーティストの遠藤麻衣とキュレーターの権祥海を中心に、日韓朝におけるマダン劇の調査・表現・共同制作を目的とするプロジェクト。最近、京都市東九条マダンのリサーチや韓国のアーティストのカクソジンによるワークショップを開催し、マダン劇が体現してきた共同体の身体の歴史を幅広く共有する活動に取り組む。

<https://www.sanghaekwon.com/>



## へびと地層プロジェクト|小森はるか+瀬尾夏美

私たちは現在、宮城県丸森町と東京都江東区に拠点をもち、制作しています。丸森町は、高度経済成長による林業などの生業の変化、原発事故、震災復興のための土砂採掘、ソーラーパネルの建設等によって山が荒れ、巨大化した台風によって2019年に被災しました。江東区は、江戸時代から都市部のゴミの埋め立て地で、震災と戦災、そして開発が繰り返されてきた、東京の内にある“地方”のような土地です。私たちはこのふたつの土地と、岩手県陸前高田市、そしてマーシャル諸島、インドネシア等を調べ、各地の語りを聞き、人びとと創造的な共同作業を行います。すべて水に関わる災害に遭った土地であり、各地を横断することで、よりグローバルな形で構造的格差について検証し、“災禍を語り継ぐこと”の実践を通した関わり合いを試行します。

### 小森はるか+瀬尾夏美:

映像作家の小森はるかと画家で作家の瀬尾夏美によるアートユニット。東日本大震災を受けてボランティア活動で東北を訪れたことを機に活動を開始。2012年から3年間岩手県陸前高田市に暮らしながら制作に取り組む。2015年仙台に拠点を移し、土地と協働しながら記録をつくる組織、一般社団法人NOOKを設立。風景と人びとの言葉の記録をテーマに制作を続ける。現在は全国各地に赴いてフィールドリサーチを行い、制作と対話の場づくりをしている。

<http://komori-seo.main.jp/blog/>



## メンテナンス労働と共生関係のドキュメンテーション|渡邊拓也

福井県にある小原という限界集落で見られる草刈りという労働を中心として、自然と人との共生関係を映像によるドキュメントとして残していく。その映像素材をもとに、村に関わる人々との上映会や食事会の機会を通して、伝統化した習慣や、単なる労働と捉えているものを新たな角度から捉え直し、土地に残る集合知を再発掘する場を創出する。さらに、自然との複雑な相互作用の中で、人の介入がどのように作用しているのかを、さまざまな視点から考察する場へとつなげていく。

### 渡邊拓也:

2016年に東京藝術大学大学院美術研究科を修了。その後、Arts Initiative Tokyo [AIT] アーティスト・プラクティス2016/2017を修了。近代以後に普遍化した構造的な力を、具体的な人物の言葉や所作から可視化するような映像インスタレーションを制作している。近年の主な活動として、Delfina Foundation Residency Programme (2024, ロンドン) など。

<https://wtakuya.myportfolio.com/>





## オープンスタジオ / 3.11後の復興に関する資料ライブラリー |

### 志賀理江子

東日本大震災から13年が経とうとしています。この長い時間では、直接的な死の衝撃が和らぎつつも、今、自分が生きている命の重みと、急速に変容する数々の「復興計画」がもたらした影響が、たくさんの人たちの複雑な想いとなって渦巻きました。同時にその分だけ、強く生きようとする力も生まれていることも実感する今、このオープンスタジオは「3.11後の復興に関する資料ライブラリー」という常設展示を通じて、ゆっくり本などを読める空間となるよう、感受性が育まれる場所に育つよう、制作スタジオを開き、読書会・ワークショップを不定期で行うことでも、様々な分野の人たちと共に考え、試行錯誤の実践をしていきたいと思います。

#### 志賀理江子：

写真家。1980年愛知県生まれ、2004年チェルシー・カレッジ・オブ・アート卒業、2008年より宮城県在住。主な展覧会に2012年「螺旋海岸」(せんだいメディアテーク)、2019年「ヒューマン・スプリング」(東京都写真美術館)、2023年「さばかれえぬ私へ・waiting for the wind」(東京都現代美術館)など。2011年、東日本大震災での沿岸部における甚大な被害、社会機能喪失と、その後の「復興」に圧倒されるという経験から、人間精神の根源とその社会への双方への影響を、写真や映像メディア制作を土台に探求している。



## 匿名の語り | 藤口諒太

アルコールをはじめ、様々な依存症を持つ人々のための自助グループ「アルコールクス・アノニマス」のメンバーと共に、コロナ禍や戦争、震災など特殊な社会状況下のケア活動について話し合うプロジェクト。定期的に行われるグループミーティングは、当事者にとって命に関わる重要なケア活動であるが、コロナ禍において彼/彼女らはそうした他者との接触の機会を持たず、自助が個人の責任となり苦境に陥った。そうした状況を振り返り、当時揺さぶられた倫理と道徳の関係を対話を通して再検討する。更に、グループの信条として匿名を保たねばならない故に記録として残りにくい彼/彼女ら自身の声と語りから、フィクションラジオドラマを創作する。

#### 藤口諒太：

録音家、アーティスト。映画を始め、様々な媒体の録音に携わる。それらの経験を通じ、録音という行為そのものを、社会的論点の記録、多種多様な人々との接続を可能にする手段と捉え、メディアとして用いた作品制作を行う。社会的、歴史的に不可視化された諸問題や、無名の人々の存在を聴覚的に浮かび上がらせることを試みる。



## ネガティブな想像上の家族からポジティブな家族像を生み出すために | 寺田健人

本プロジェクトは、「家族」をテーマにし、性的マイノリティに焦点を当てています。作品〈想像上の妻と娘にケーキを買って帰る〉は、規範的な家族のステレオタイプに批判的なメッセージを込めており、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの形式を通じて性的マイノリティの経験を収集し反映させる計画です。作品は、企画者がゲイであることを隠してきた経験から生まれ、カミングアウトが難しい状況にいる人々の声を代弁し、理解を促進します。インタビューと被写体との共同制作を通じて、過去の苦しみを共有し未来の家族像を模索します。プロジェクトは、異性愛者として振る舞ってきた経験を通して多くの人々が共感し、励まされる可能性があります。最終的には、性的マイノリティの人々が真の自己を受け入れ、誇りを持つ家族をイメージできるようなポジティブなメッセージを提供します。

#### 寺田健人：

1991年沖縄県生まれ。社会が作り出した「性」や「生まれ」に関する諸規範によって人々の行動・思考が決定されていく生政治に関心を持ち、ラディカル・フェミニズムが生み出したテーゼ「個人的なことは政治的なこと」の実践として、主にパフォーマンスと写真を軸にして美術作品の制作を行なっている。最近の展示に、2023年 T3 PHOTO FESTIVAL TOKYO 2023『態度が〈写真〉になるならば』@東京建物八重洲ビル(八重洲)、2022年「想像上の妻と娘にケーキを買って帰る」BankART Under35 2022 @Bank ART Kaiko(横浜、神奈川県)







## ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成について

当財団では、多くのソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクトは単年ではなく、長期間にわたって行われるケースが大半です。その活動の特性を鑑みて、「ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成」が2023年度より立ち上がりました。

「ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成」は、国内で実施されている質の高いソーシャリー・エンゲイジド・アートプロジェクトに対して顕彰（けんしょう）し、複数年にわたって支援することを目的としております。

助成プロジェクトの選考に当たっては、すでにその活動が一定の評価を得ており、ソーシャリー・エンゲイジド・アートへの理解を促し、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの新たな可能性を示すプロジェクトであることとして、助成対象プロジェクトを決定いたしました。

※第一回目の「ソーシャリー・エンゲイジド・アート長期支援助成」は2013年から活動を開始している「Don't Follow the Wind（ドンド・フォロー・ザ・ウィンド）」と致しました。

支援内容：年間50万～100万円

助成期間：最大10年間



### 《Don't Follow the Wind》概要

構想から12年、スタートから9年が経つ《Don't Follow the Wind》は、東京電力福島原発の事故に伴う帰還困難区域のなかにある複数の建物を会場として、国際展をつくるプロジェクト。国内外3者のキュレーターが選出した12組のアーティストが参加する（うち半数が国内作家）。一般公開のタイミングは政府による帰還困難区域の解除に従っているが、除染に伴う建物の倒壊や、動物の介入などにより変化する作品のメンテナンスなどを、年間を通して行っている。プロジェクトを伝える「ノンビジターセンター」は世界各地のビエンナーレ等の展覧会を過去30都市以上回っており、2023年はニューデリーとギーセン、パリを訪問。科学者と協働し、帰還困難区域内に生息する動植物の生態系の変化も観察している。



### ◎審査員 ※長期助成は除く

工藤安代（NPO法人ART&SOCIETY研究センター 代表理事）

清水知子（東京藝術大学大学院国際芸術創造研究科准教授）

藤井光（アーティスト）

藪前知子（東京都美術館学芸員）

### ◎2024年度助成贈呈式を開催しました。

助成団体7団体のご紹介、および採択プロジェクトのプレゼンテーション、審査員による所感・コメントも発表しました。

日程：2024年3月29日（金）15:30-17:00

場所：YUWAERU（結わえる）本店 東京都台東区蔵前2-14-14

参加者：助成受賞団体（オンライン参加含む）、審査員

当財団理事長及び理事



### 一般財団法人川村文化芸術振興財団

### ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成について

一般財団法人川村文化芸術振興財団は、文化芸術により人々の創造性や表現力を育み、よりよき社会の構築を目指すために2017年2月15日に設立されました。当財団は優れた能力を有する芸術家に対し活動を支援し、これまで培われてきた文化芸術を継承、発展させ、独創性のある革新的な文化芸術の創造を促進することを目指します。本助成事業はコミュニティや社会にコミットし、地域社会や住民とともに制作や活動を実施し、より良い社会モデルの提示や構築を目指す国内のソーシャリー・エンゲイジド・アートのプロジェクトに対して、毎年採択しています。助成対象は門戸を広げて年齢・国籍不問とし、海外からの応募も積極的に受け付けています。

### 本事業および取材・掲載のお問い合わせ

一般財団法人川村文化芸術振興財団

ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成

東京都千代田区外神田2-15-2

公式ウェブサイト <http://www.kacf.jp/>

E-mail: [info@kacf.jp](mailto:info@kacf.jp)